

卒業研究発表 パワーポイント集

2013年度

1. 大学生の性と性教育に関する認識について

* 左が発表時に提示したスライド、右がスライドの説明文です。

大学生の性と 性教育に関する認識について

保健栄養学科保健養護専攻 鈴木麻里
中村めい
芳賀有里加

これから教育学研究室的鈴木麻里、中村めい、芳賀有里加が「大学生の性と性教育に関する認識について」の発表をさせていただきます。

本日はこれまでの研究成果を発表させていただきます。

課題意識

☆クラミジア感染

国内での感染者数100万人以上

性交経験者のうち、女性13.1%、男性6.7%が感染(一般の高校生を対象)

10代後半から20代にかけての感染者数が増加傾向

性教育のより一層の
充実が求められている

私たちの課題意識についてです。

日本国内でのクラミジア感染者は、100万人以上と言われています。

一部の高校生を対象とした調査によると、性交経験者のうち女性の13.1%、男性の6.7%にクラミジアの感染が見られており、10代後半から20代にかけての感染者数は、増加傾向にある、という現状があります。

これは、公衆衛生の観点から見て大きな問題であり、軽視することはできません。

これらの原因として、学校で学んだ知識が子どもたちに定着していないこと、性教育バッシングの影響により学校が性教育に対して消極的であること、家庭での性教育への取り組みの少なさなどがあるのではないかと、私たちは推測しました。

この問題を解決するためには、学校で行う性教育のより一層の充実が必要である、と考えます。

目的

- 実際に行われた性教育と生徒が求める性教育の実態の相違について調査する。
- より適切な性教育の創造のための課題を明らかにする。

以上を踏まえ、本研究は、実際に行われた性教育と生徒が求めている性教育の実態の相違について調査し、より適切な性教育の創造のための課題を明らかにすることを目的とします。

研究方法

- 1) 関連資料及び文献の収集と検討
- 2) 大学生を対象とした質問紙調査
(予備調査の結果を踏まえて本調査を行う)

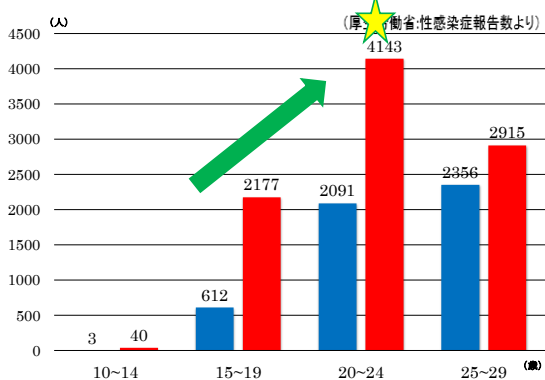
4

研究方法はご覧の通りです。

文献研究

初めに、文献研究についてです。

2012年 性器クラミジア感染症感染者報告件数



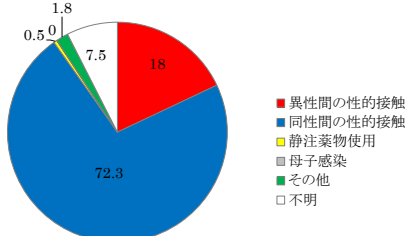
○ クラミジアについて

性感染症には性器クラミジア感染症や性器ヘルペスウイルス感染症、淋病、梅毒等数多くの種類がありますが、ここでは性器クラミジア感染症に着目していきます。

2012年感染症発生動向調査(厚生労働省)によると、中学・高等学校在学中から増加し始め、20歳を超えた時期にピークとなることがわかります。また、若年層の女性の感染症罹患率が高いことから、不妊につながる可能性があると懸念されていますが、性感染症は無症状のことが多く、気が付かなかったり、症状に気が付いても医療機関を受診しづらい現状があるため、感染者は数値以上にいると考えられます。さらに、近年、オーラルセックスが広く行われていることから、咽頭に感染するケースが増えているという報告もあります。したがって、咽頭感染も含めるとかなりの感染者数になるのではないかと推測します。

HIVの動向

2012年 新規感染者1002件(過去6位、前年より52件減少)



2012年に報告された新規HIV感染者の感染経路別内訳
2012年 厚生労働省エイズ動向委員会

7

○ HIVについて

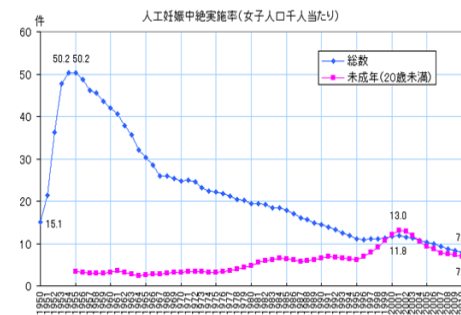
厚生労働省のエイズ動向調査によると、2012年のHIV新規感染者は1002件報告されていました。これは過去6位の報告数であり、前年の1056件より52件減少しています。

このHIV新規感染者は2008年をピークとして、2007年以降、年間1000件以上を維持しています。

また、感染経路別内訳を見ると、異性間の性的接触が180件で18.0%、同性間の性的接触が724件で72.3%と、性的接触によるものは合わせて904件、90.2%を占めていました。また、母子感染は1例もありませんでした。

AIDSについては447件と、過去最高を記録した前年の473件よりも26件減少を示し、過去3位の報告数でした。

未成年の妊娠中絶についての状況



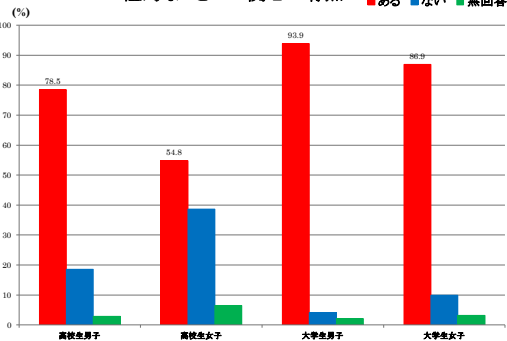
平成21年度衛生行政報告例の概況より

○ 未成年の人工妊娠中絶について

次に、未成年の妊娠中絶についての状況です。

未成年の中絶率は、高度成長期から安定成長期にシフトした1970年代半ばから徐々に上昇傾向となり、特に、1990年代後半に急上昇しています。これは早いうちからの女子のセックス経験が増えたことが背景にあると考えます。その結果、未成年の中絶率は、女性全体のレベルを2000年には上回る異常事態となり、2001年にピークを迎えています。その後はやや低下傾向になっているという現状です。

性的なことへの関心の有無

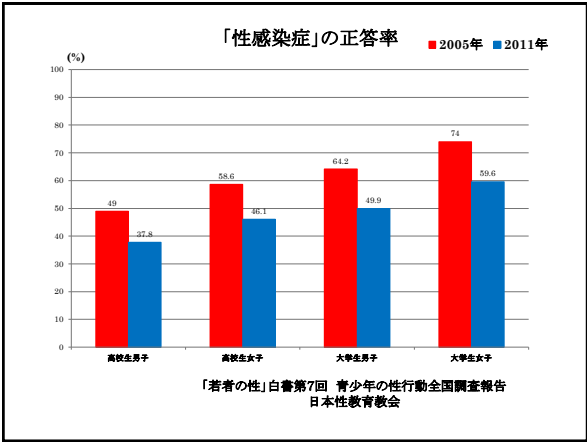


「若者の性」白書第7回 青少年の性行動全国調査報告
日本性教育学会

○ 性的なことへの関心の有無

これは高校生と大学生の性的な事柄への関心の有無を表した図です。

ご覧のとおり、性的なことへの関心を持ったことのある学生数は高校・大学に上がるにつれて増加しています。また、男女の性的な事柄への関心の有無には差が認められました。



○ 「性感染症」の正答率

また、「クラミジアや淋病などの性感染症を治療しないと、不妊症になることがある」という質問に対して「正しい」と答えた学生は、高校生の男女とも半数を切っていました。

この性感染症の知識は2005年の前回調査と比較すると1割以上も正答率が下がっており、高校生以上に大学生で正答率の低下が際立っていました。

以上のことから、性的な事柄への関心が高まる高校生までの時期に、性に関する正しい知識を定着させることが重要になると考えます。

質問紙調査

続いて質問紙調査についてです。

質問紙調査の概要

調査目的

- 高校卒業までに受けた性教育の内容を知る。
- 性交(セックス)についての考え方、捉え方を知る。
- 性の情報をどこから得ているかを知る。

調査時期

- 平成25年11月～12月

調査対象

- 大学生 男性31名 女性148名

質問紙の概要はご覧の通りです。

本学と、他県の共学大学の学生290名に質問紙を配布し、179名から有効な回答を得ることができました。回収率は61.7%でした。

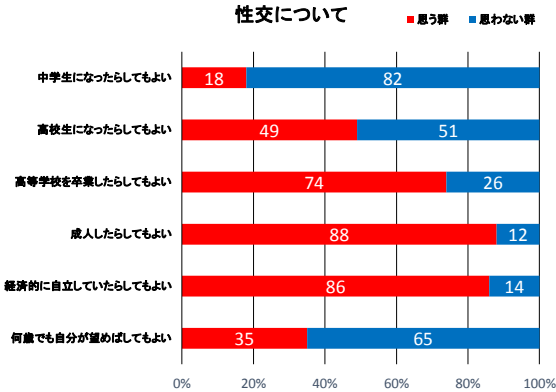
質問紙調査枠組み

- 下記の通り大きく13項目に分けて調査を行った。
- (【】内は質問番号)
- 対象者の属性: 欄外
- 性教育:【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【8】
- 性交(セックス):【9】【10】【11】
- 人工妊娠中絶:【12】
- 性の情報:【13】

13

質問紙の枠組みはご覧の通りです。

性交について



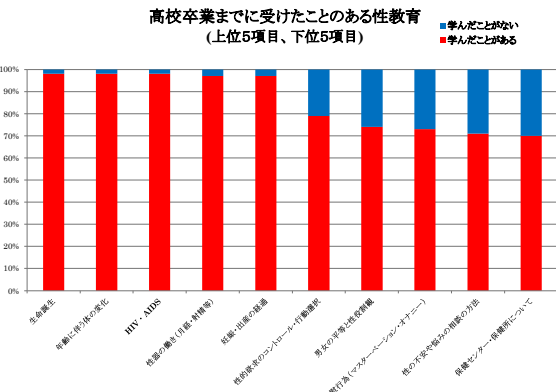
性交について

性交についての21項目について、「そう思う」「どちらかというと思う」を「思う群」、「どちらかというと思わない」「そう思わない」を「思わない群」としました。

結果より、中学生、高校生、高校卒業後と年齢が上がるにつれて、性交してもよいと考える割合が増加しており、成人したとしてもよい、経済的に自立していたとしてもよいと答えた者も85%程度みられました。

その背景には性教育バッシングの影響によって適切な性教育を受けておらず、性行動に対して自己規制が働いており、慎重化していると考えます。

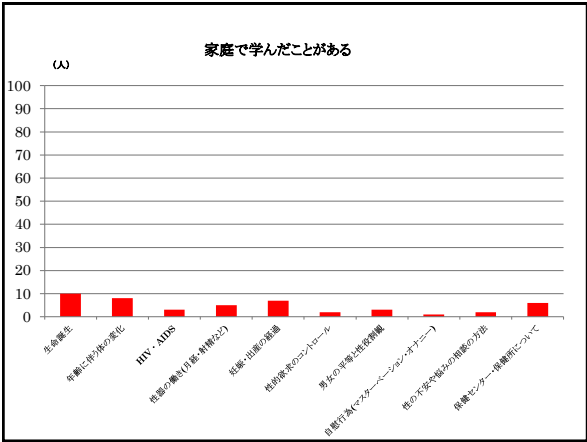
高校卒業までに受けたことのある性教育 (上位5項目、下位5項目)



高校卒業までに受けたことのある性教育

私たちが質問した性教育とは性交にかかわる内容だけではなく、生命誕生や、男女平等などの項目も含み、学校での性教育を受けたことがあるかという質問には179名全員があると答えました。

ですが、学んだ内容にばらつきがあることがこのグラフからわかります。特に保健センター・保健所について、自慰行為、性の不安や悩みの相談の方法に関しては学んだ生徒が少ないことが分かります。

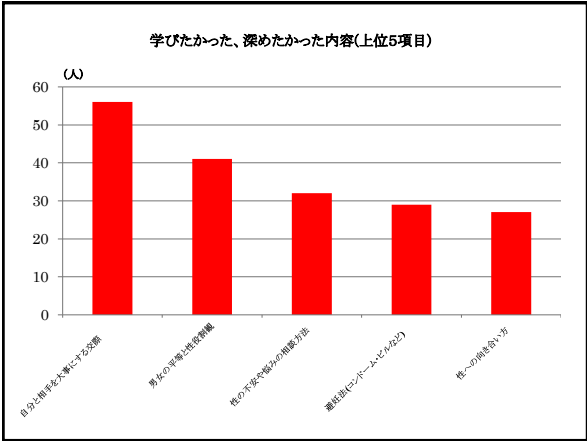


○ 家庭で学んだことがある内容

これは家庭で受けたことがあると答えた性教育の内容です。

先ほどの高校卒業までに受けたことのある性教育の内容のグラフと比較すると、ほとんどの家庭で、性教育が行われていないことが分かります。

したがって性教育の大部分は学校に委ねられており、学校が行う性教育の果たす役割は大きいと考えます。

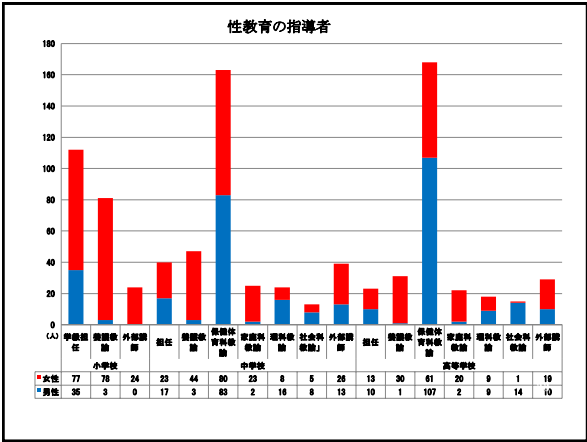


○ 学びたかった、深めたかった内容

これを見ると、自分と相手を大事にする交際、男女の平等と性役割観についてより深く学びたかったと答えている学生が多いことが分かります。

つまり多くの学生は、人間関係の築き方についてより深く学びたいと感じていると言えます。

これは、大学生は性について学んだ知識を実践する年代であり、実際にパートナーとの人間関係を構築する難しさを実感する時期であるからだと考えます。



○ 性教育の指導者

続いては性教育の指導者についてのグラフです。

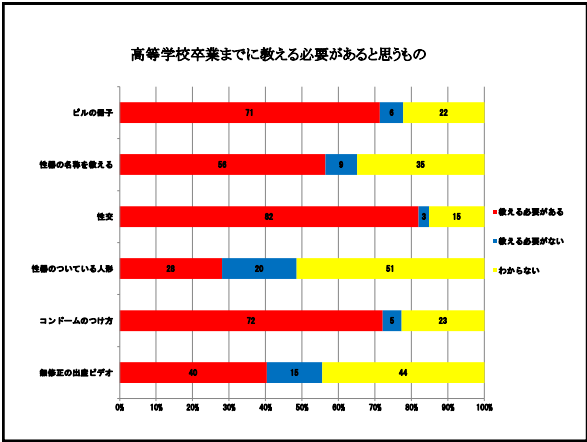
性教育を行うのは、小学校では担任が多く、教科担任制をとる中学校、高等学校では保健体育科の教諭が圧倒的に多いことが分かります。

これでは、生徒たちがより深く学びたいと答えていた、人間関係の築き方について指導するには不十分ではないかと考えます。

本来、性教育は保健体育科だけで行うのではなく、道徳や特別活動、理科や社会科、家庭科などの各教科の特質に応じて教育活動全体を通じて行なわれなければなりません。

そのため、社会科や家庭科の時間で教える内容も含まれているのです。

また、性感染症やHIV・AIDS、避妊法への関心も高いため、保健科教諭や養護教諭だけではなく、学校医や助産師などの外部講師に協力を仰ぐ必要があると考えます。

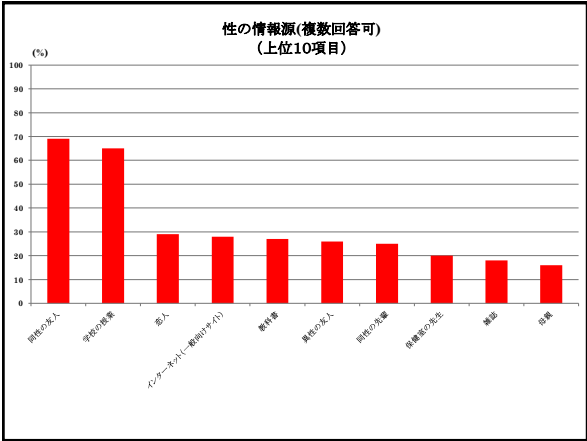


○ 高等学校卒業までに教える必要があると思うもの

「性教育は学校で行うべきか」という質問をしたところ、「はい」が173名、「いいえ」が5名という結果になりました。

また、学校で性教育を行う必要があると答えた学生を対象に、「ピルについて書かれた冊子を配る」、「性器の名称を教える」、「性交について教える」、「性器のついている人形を用いる」、「コンドームの付け方を教える」「無修正の出産ビデオを見せる」という内容を学校で教える必要があるかという質問をしたところこのような結果になりました。

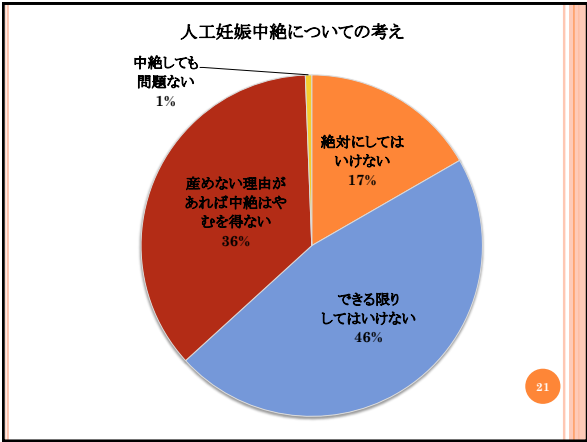
これらは以前にバッシングを受けた内容なのですが、学生たちの多くは教える必要があると答えています。



○ 性の情報源

性に関する情報源を複数回答可で質問したところ、実際の情報源としては同性の友人が最も多く、次いで学校の授業が二番目に多いことが分かります。

同性の友人から性の情報を得ている学生が多いため間違った情報が蔓延してしまう危険性もあります。そのため授業などの正しい知識を得る機会が子どもたちには不可欠であると再確認しました。



○ 人工妊娠中絶についての考え

次に、人工妊娠中絶についてです。

63%が人工妊娠中絶をしてはいけないと考えていることが明らかとなりました。しかし、10代の若者の中絶が横ばい傾向なのは、避妊についてしっかり教えていないからであると推測します。このことから、日本の性教育の遅れが考えられます。

本研究の限界と課題

- 質問紙の男女比について
- 質問紙調査の回収時期について
- 質問紙の内容について

22

本研究の限界と課題です。

- 質問紙の男女比について
男子の質問紙調査数が女子に比べて圧倒的に少なくなってしまう、結果に信憑性を持たせるためにも男女比を等しくする必要があります。
- 質問紙調査の回収時期について
今回の質問紙調査は配布から回収までの期間が短く、一部、集計までに回収を行えないものがあったため、配布から集計までを考えた回収時期を設ける必要がありました。
無回答のため有効な回答が得られない質問項目も多くみられました。
- 質問紙の内容について
特に、「性教育を受けた経験の有無」の質問の選択肢で、「はい」の場合はどこで学んだかの選択肢を設けましたが、無回答が多く見られました。「小・中・高・家庭」に「覚えていない」を加えることにより、回答者が答えやすい質問紙となり、より正確な結果が得られたのではないかと考えます。また、質問項目が多いのも原因と考えられるので、要点を絞った質問紙を作成することで多くの有効回答を得ることができるのではないかと考えます。
質問紙作成者が全員女性のため、質問項目の内容が女性目線のものが見られました。
「性教育が実生活で役に立ったか」という質問に対する回答選択肢を「性交(セックス)の時」「避妊の時」「月経の時」「自慰行為の時」「恋人と付き合う時」「人間関係を築く時」「その他」と設けましたが、「精通」等の男性の生理現象の項目が抜けていました。
今まで受けた性教育の傾向に関する質問を行いました、中学校と高等学校をわけ、それぞれ質問をすることで、校種別による性教育の傾向が明らかとなったのではないかと推測します。

今後の展望(提言)

1. 指導内容の統一、ガイドラインの作成
2. 性教育推進委員会の設置
3. 性教育の形態について

23

性行為の時期に関して「中学からしてもよい」という項目はありましたが、「小学校からしてもよい」という項目はなく、小学生からはだめなのかというご指摘がありました。可能性を幅広く考え質問紙作成をすべきでした。

次に今後の展望についてです。

- 一点目は指導内容の統一、ガイドラインの作成です。
日本には性に関する内容について、何をどのように指導するかを明確に記したガイドラインは存在しません。独自に作成している県もありますが、全国に浸透しているわけではなく法的な拘束力を持つものではないのです。
現在は学習指導要領に基づいて、各学校独自に指導を行っています、七生養護学校事件のように創意工夫を凝らした指導が過激だと攻撃を受けてしまう可能性もあり、性教育に対して慎重になっている学校も多くあると考えます。
しかし、国が指導の指針となるガイドラインを作成することでどの生徒も平等に知識を得ることができ、教員も安心して性教育に取り組めるのではないのでしょうか。
- 二点目は性教育推進委員会の設置についてです。
今回の質問紙調査では、人間関係の築き方についてより深く学びたいと考えている者が多いことが明らかとなりました。これは大学生になるとパートナーとの関係が深くなり、性について学んだ知識を実践する機会が増え、パートナーとの関係を築く困難さを実感したためではないかと推察します。
本来、性教育は教育活動全体を通じて行うものであり、保健科だけでなく、家庭科や社会科、道徳等で指導する内容が含まれています。また、家庭科が作成した「性教育指導マニュアル」等にもあるように、性に関する指導に当た際には他の教員の理解を得て行わなければなりません。これらのことから、教員が相互に連携し合うことで生徒のニーズに即した教育を展開することが出来るのではないかと考えます。

同上

そのために、校内に性教育推進委員会を設置し、指導計画や指導内容、教材等についての検討を行います。そうすることで、学校教育全体を通して計画的、組織的な指導を行うことが出来るようになると考えます。

- 三点目は性教育の形態についてです。
今回の質問紙調査では、性教育の形態は男女一緒に多く見られました。しかしながら、希望する形態は「状態・発達段階に応じて」が多く見られ、学校での性教育は児童生徒の様子や発達段階を常に観察し、内容に応じて形態を変え、必要に応じて男子だけの授業や、月経についての授業を行う学校が多いですが、男子も同じく男子だけを集め、身体の変化や射精について学び、女子には月経という自然現象が起きるということを教えることで、その後に身体の変化の仕組みを学ぶとき、男女一緒に違和感なく授業に参加できるのではないかと考えます。
また、授業形態の工夫として、T.Tの活用を提案します。1人の授業であると、その教諭の性別による偏りが出てしまう可能性があると考えます。そこで、男女の教諭のT.Tの授業を行うことで、児童生徒は男性と女性の両方の視点から性教育を学ぶことができ、お互いの身体と性を尊重ができるのではないかと推測します。
教育実習生が性教育を行う学校もあります。性教育は生き方学習であり、今後の児童生徒に大きく影響してくるものだからこそ、正しい知識をしっかりとった教諭が行うべきであると考えます。

今後の展望(提言)

- 4. 授業での工夫～体験学習～
- 5. 避妊法、性感染症についての指導の充実
- 6. 家庭で行う性教育

24

○ 四点目は、授業での工夫についてです。

今回の質問紙調査では、学校での性教育の比重の重さが明らかとなり、学校での性教育の充実が求められています。その充実のための授業の工夫として、体験学習が考えられます。体験学習の利点には、体で学ぶことができ、記憶に残りやすいことと、興味を引き出しやすいことがあります。

体験学習の重要性は平成8年7月19日の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」でも述べられています。そこで性教育での体験学習の例を三点考えました。

一点目はHIVやAIDS、性感染症の広がりを水の着色を見て学ぶ、ワークショップ、二点目はコンドームに実際に触れて、材質や性質を学ぶ直接体験、三点目はカップルを仮定した役を演じ、相手を思いやる心を学び、今後パートナーとどのような関係を築くべきなのか考えるロールプレイングです。こうした体験学習を通して、避妊の大切さや相手を思いやる心を育むことで、今後のよりよい生活に生かすことが出来ると考えました。

○ 五点目は避妊法、性感染症についての指導の充実です。

質問紙調査の結果から、避妊法や性感染症については多くの者がより深く学びたかったと答えており、指導内容をさらに充実させる必要があると推察されます。

避妊法についてはコンドームを取り上げて指導を行う場合が多く、ピルに関しては否定的な教員もいることから、個人の裁量に委ねられています。しかし、ピルについて教える必要があると答えた学生が70%以上であったことから、避妊法として選択するかは学生の自由であるが知識として提供すべきではないかと考えます。

性感染症を指導する際には、疾病について教えるだけではなく、コンドームを使用する、性交しないなどの予防策や、保健所等で行っている検査、また電話やメールなどで相談が出来る医療機関やホットラインの存在について触れ、早期発見や不安の解消が出来るような知識を提供していきます。

同上

○ 六点目は家庭で行う性教育についてです。

質問紙調査の結果から、家庭の性教育の取り組みの少なさが明らかになりました。性教育に熟練した家庭もごく少数存在しましたが、ほとんどの家庭では性教育は行われていませんでした。

しかし、両親が妊娠時の体験を話すことだけでも十分な性教育になります。子どもが自身の出生について興味を持った際に、胎内での様子や妊娠が判明したとき、出産したとき等の両親の喜びについて語ってあげることで「生命誕生」や「妊娠・出産の経過」についての大きな学びになり、子ども自身も興味を持って話を聞くことが出来ると考えます。

また、家庭によっては性の話題はタブー視されている場合がありますが、これは子どもが二次性徴を迎える前の段階から身体の変化について教えてあげることでも払拭できるのではないかと考えます。幼少期から健康教育の一環として、身長や体重の増加とともに体に変化していくことを子どもの成長とともに話すことで、精通や初経を迎えたときの戸惑いや恥ずかしさを軽減できると推察します。このような子どもが幼い時からの積み重ねによって、思春期を迎えても性についての会話が出来る関係を築くことが出来ると考え、家庭で性教育を受ける前の土台づくりをしてもらえるような家庭の協力を得るために養護教諭として啓発に努めていきます。

ご清聴ありがとうございました。

51

以上で発表を終わります。
ご清聴ありがとうございました。